

研究ノート

保育内容の指導法「表現」の音楽分野に関する考察  
—音楽表現活動におけるICT活用に着目して—

諸井 サチヨ

(受理日：2021年1月6日)

A Study on the Music Field of “Expression”,  
Teaching Methods for Childcare Education  
—Focusing on ICT Utilization in Music Expression Activities—

Sachiyo MOROI

要 旨

本研究では、保育内容の指導法「表現」における音楽分野に関する考察として、特に幼稚園等<sup>1</sup>での音楽表現活動でのICT活用に着目し、検討した。例えば幼稚園教育要領解説には、「豊かな感性を養うためには、何よりも幼児を取り巻く環境を重視し、様々な刺激を与えながら、幼児の興味や関心を引き出すような魅力ある豊かな環境を構成していくことが大切である」<sup>2</sup>とあるように、感性を豊かにする活動である芸術でICTを活用した際にICT活用の効果が見込めるのか。ICT活用についての先行研究が極端に少ないことから、音楽表現活動においてはこれまでICTの導入や活用が考えられていなかったということが明らかとなった。

幼稚園等での音楽表現活動では、朝の会や行事にかかわる季節の歌等の歌唱活動以外にも、リズム楽器を使用した合奏や音楽発表会など、大がかりな活動もおこなっている。今回の研究では、そのような活動を進める過程で、ICTを活用する、もしくはICT活用を補助的な役割として、例えばオーケストラ等の舞台での実際の映像を子どもたちに見せるようなことで、視覚的にイメージがわきやすいようにする活用方法が適切で、なおかつ効果的なのではないかということが示唆された。音楽表現活動でのICTの活用についての目的は、子どもたちの興味関心をひくことなのである。

いわゆる保育者養成校<sup>3</sup>においては、ピアノ初心者<sup>4</sup>の学生に対するピアノの弾き歌い指導が優先されがちではあるが、今後は適切なICT活用についても授業内で取り組み、幼稚園や保育所等に就職し、音楽表現活動で安定的にICT活用を取り入れられる方法を考えていくことが課題であるということが分かった。

キーワード：幼児教育、ICTの活用、幼小接続、表現活動

はじめに

保育内容「表現（音楽）」の指導法のカリキュラムを考える時、音楽分野であってもモデルカリキュラム<sup>4</sup>をみると、ICT<sup>5</sup>の活用が盛り込まれている。ICTの活用については、すでに日本でもかなり前向きに取り組み、様々な教育機関で多くの教員が授業で取り入れている。小中学校でも、ICT環境の整備がおこなわれ、授業内で電子黒板等を使っているところがあるほどだ<sup>6</sup>。しかしながら、表現

活動、特に筆者の専門分野である音楽分野の内容や活動においては、ICTの活用をどのように進めていくべきかが難しい部分があると考えられる。なぜなら、芸術、特に音楽分野において、ほとんどの場合、実際の音や、演奏に触れることが最良だろうというイメージがあり、ICTを活用した場合に生演奏や実際の音に比べ、どの程度の効果を得ることが可能なかという疑問が生じてしまう。そういった機器に頼るよりもやはり実際の音を聴いたり、

作品に触れたりすることが第一だという価値観が存在するのではないだろうか。感性や表現力、要するに目に見えないものを培う分野の活動で、ICTをどの程度活用しているのかという不安も生じる。そしてその効果についてもなかなか測定することは難しいのではないとも考えられる。

例えば、現在の新型コロナウイルス感染症が拡大している状況における、学校教育の在り方や可能性を検討しなくてはならない状況で、ICTを駆使したオンラインでの授業の取り組みが様々な高等教育機関でも急速に模索されている。筆者が担当する弾き歌いの授業について少し述べると、実技系の科目の主である弾き歌いのピアノレッスンでさえも、新型コロナウイルス感染症が拡大している状況下においては、やむを得ず遠隔にて実施している状況である<sup>7</sup>。

今回は、幼稚園等でおこなわれる表現活動の中でも、筆者の専門分野である音楽分野について、ICT活用が相応しいのか、また限定的にでも活用できる場合どのような環境で活用することができるのかについて検討し、効果が期待できるのかを考えていきたい。また、保育内容の指導法「表現」における音楽分野の授業では、実習や就職後にICT活用をするために、どのようなアプローチができるのかを考えていきたい。

## 1. 先行研究の検討

芸術、特に音楽分野においては、やはり本物の音ということにこだわる傾向があるため、これまでの研究においても、音楽の活動等でICTを活用することに関してはあまり研究されてきていないと言える。ICTを活用した研究についてはまだ途上というよりは、研究されてこなかったと言った方がよいかのかもしれない。例えばCinii (NII 学術情報ナビゲータ) で、検索語「保育+音楽+ICT」で検索すると7件しかみあたらない。「幼児+音楽+ICT」では、3件のみだ<sup>8</sup>。その中には、内容がピアノの弾き歌いの学習支援としてのICT活用のもも含まれており、実際には弾き歌い指導に関係するものである。要するに実情としては、幼児教育の音楽分野でのICTの研究はほとんどされていないということだ。

保育者養成に関しては、音楽分野において、まずピアノ初心者の学生に保育における必須技術であるピアノの弾き歌いをどのように指導していくのか、指導のための教材はどうするのか、効果的な指導方法はどうかなどの研究が最優先で、これまで音楽分野の研究がピアノの演奏技術や弾き歌いに関するものばかりになっている。保育者を目指す学生の多数がピアノ初心者であるため当然のことではあるが、保育者養成校における音楽分野の研究の現状はピアノの指導方法にかなり偏っていると言える。保育者養成校での学びの期間が2年という短い期間であるため、優先される事項がピアノの演奏技術の向上になってしまうのはやむを得ない。実際にCiniiで検索語「保育+ピアノ」で調べてみると628件、「保育+弾き歌い」で132件が検索される<sup>9</sup>。このような状況を考えても、やはり、保育者養成や保育技術向上において音楽の分野で多く研究されていることは、ピアノに関係するものが圧倒的に多いということがよくわかる。

保育者養成の授業内でのICT活用や実際の保育現場で保育者がICTをどのように活用できるのか、その可能性はどの程度あるのか、さらには保育、特に音楽表現活動でICTを活用できるのか、もしできるとするならば、どのようなメリット・デメリットがあるのかについての研究は、まだ少ない状況であると言える。

## 2. 幼稚園等での音楽表現活動について

音楽表現活動でのICT活用について考える前に、幼稚園等での音楽表現活動の現状を考えてみたい。幼稚園等での音楽表現活動として一番よくおこなわれている活動としては、歌唱活動があげられる。代表的なものは、朝の会、お昼、帰りの会での歌唱である。具体例としては朝の会では「おはよう」を歌い、お昼には「おべんとう」を、帰りの会では「おかえりのうた」の歌唱等である。日々の生活関係の歌以外にも、毎月、行事や季節に沿った幼児歌曲を多くの幼稚園等では取り入れている。例えば、時の記念日の月には「とけいのうた」や「大きな古時計」、母の日の月には「おかあさん」など、日本特有の季節の行事に合わせた幼児歌曲が多くあるため、それらの歌を毎月行事に合わせて歌っている。

日々の保育の中で何度も繰り返し歌う幼児歌曲に関しては、簡単な振りをつけて歌っている場合もある。また、簡単なリズム楽器であるすずやカスタネット等の楽器演奏をしたり、鍵盤ハーモニカの練習をしたりする場合もある。リズム楽器に関しては、幼児歌曲に合わせて鳴らしたり、歌を歌いながら鳴らしたりする場合もある。

そういった楽器の指導は、担任の保育者がおこなうことがほとんどだが、中には、音楽の専門の講師に依頼し、指導を受けている園もある。

さらには、独自の活動として、運動会などで鼓笛隊を取り入れているところもある。鼓笛の活動をおこなっている場合は、一年を通して鼓笛の練習に時間をさいているところもある。

また、日々の音楽表現活動の発表の場として、音楽発表会やお遊戯会等を開催している場合が多い。さらには、リトミックを実施している場合もあり、音に合わせて自由に体を動かす活動等をおこなっている。

このような活動の種類や規模を考えると、幼稚園等での音楽表現活動には多くの時間を割いていることがわかる。幼児歌曲は、大変短い曲が多いため、あっという間に歌い終わってしまうものだが、初めての曲を歌えるようになるためには、子どもたちが覚えるまで時間が必要である。さらに発表会に向けての練習となると、合奏の場合は、年齢が上がるにつれて、扱う楽器の種類や数も多くなり、大きな楽器を使用する場合もあるため、それぞれが役割をしっかりと理解し、楽曲を作り上げるまでかなりの練習時間を要することになる。年少児で楽器の種類が限られているとしても、楽器を鳴らすタイミングや歌を覚えるために、保育者がお手本を見せながら、ゆっくりのテンポから始めて練習を重ねていくため、かなりの準備時間を費やすことになるだろう。

これらのことを考えると、子どもたちが幼稚園等で過ごす間、音楽に触れる機会や時間は、想像以上に多いということがわかる。

音楽表現活動においては、幼稚園教育要領第2章の「表現」ねらい及び内容<sup>10</sup>の(6)に「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」と書かれているように、日々の保育の中で、歌唱や楽器を使った活動

などが必要不可欠である。これを踏まえ、日々の歌唱や楽器練習が実施されている。要するに、子どもの頃の表現活動は、実際の音や作品に触れることが大切にされていなければならないということだ。

さらに、これらの音楽表現活動は、保育者の都合や主導でおこなわれるべきでなく、子ども主体でおこなわれなければならないということだ。

### 3. ICT活用について

#### 3-1. 保育内容「表現」の指導法でのICT活用の可能性について

先の研究において、学生が実習を実施する際、指導実習を任せられ指導計画案を立案する時にどのような内容で実施しているかという調査を行った<sup>11</sup>が、ほとんどの学生が製作に関するものと答えている。理由としては、「時間を調整しやすいから」や「製作したものをその後の活動で使えるから」という回答があり、やりやすさの面で製作活動を取り入れている学生が大変多かった。音楽での活動に関しては、実習時の学生自身の音楽的なスキルも影響していることが原因の一つと考えられるが、音楽活動をイメージした時に、ピアノを弾くという行為が連想され、ピアノの演奏技術に自信がないことが音楽活動を選択しない原因でもある。つまり、指導計画案を作成するにあたって、もっと自身の音楽的な技術に自信があれば音楽表現活動を取り扱うことに積極的になれるということだ。

そこで、そのスキルの手助けとして、情報通信機器の活用をうまく取り入れられれば、学生の負担感の軽減につながり、指導実習や将来就職した際に、今よりもっと音楽表現活動の取り入れに前向きになっていくのではないかと考えることもできる。例えば、ピアノが苦手な学生がいた場合、伴奏が弾けないからという理由で、本来保育で使用したいと考えている曲や活動を避けてしまうということが起きるのであれば、CD等の機器を補助的に使うなどして活動が実施できるのではないだろうか。もちろん、実際のピアノの音等を子どもたちに体験してもらうことは大切だが、学生の苦手意識が取り除かれるのであるなら、そういった音源的な役割としての情報通信機器の使用を限定的にはあるが、取り入れてもいいのではないかと考える。

学生たちは既に授業課題でスマートフォンやデジタルカメラで撮影した環境構成などを取り込んでポートフォリオを作成したり、実習に関わる書類をPCで作成したりするなどして、情報通信機器を活用しており、そういった情報通信機器等を操作することには慣れてきていると考えられるため、情報通信機器を操作することにおいては問題ないだろう。

問題点としては、音質等が実際の音や感触と比較するとやはり劣るということだろう。実際にオンライン上で実技科目の授業を実施してみると、多くの問題点が明らかになった。レッスンを受けている学生の反応としては、比較的前向きにとらえている印象も見受けられるが、やはり音質、画質の問題は避けて通れない。通信環境の影響も大きく、音楽にとって一番大切な「音」が通信機器を通しての実践の場合、よほどすぐれた機器や空間、楽器を有していない限り、限界が生じる。たとえ、素晴らしい通信機器を所持していても、現在の通信速度では「タイムラグ」という問題が起るため、リズム打ちをするなど、画面越しに同時に何かをすることがかなり難しい状況である。

単純に演奏を聴くだけということなら、ある程度満足いく音質や内容になる可能性もあるだろうが、同時に双方向で実施するような内容の場合は、双方にフラストレーションが生じ、負担感や疑問だけが残る結果となってしまう。そのため、特に音楽科目の実技のオンライン上での実践や、ICTを活用した取り組みについては、様々なシミュレーションし、慎重に実施していかなければならない。

さらに、オンライン上のリアルタイム双方向のレッスンではほとんどの場合、タイムラグに大きく影響を受ける。何か伝えたいポイントがあってもこちらが指摘した箇所が相手に伝わる時には、既に過ぎてしまっていて、ニュアンスが伝わりにくい。映像と音がずれていることも多く、レッスン内で学生にアドバイスしたいことが、十分に伝えられないまま終わってしまうということが少なくない。タイムラグや画質、音質の不鮮明なこともあるため、説明することや学生の理解に、これまで実施してきた通常の対面レッスンより時間が多くかかってかなり効率が悪い。また、使用しているカメラや

スマートフォンの設置場所やアングルの問題もあり、弾き歌いのレッスンであるにもかかわらず、カメラの配置次第では、ピアノを弾いている手元がうつらなかったり、歌っている顔がうつらなかったりする場合も多い。そのような状況では、音だけを頼りにした指導やアドバイスをしていかななくてはならないのだ。一番肝心な音が通信環境や通信機器の問題で、満足いくものではないため、指導にはかなり苦慮することになる。これらの経験をふまえると、実際、学生が実習先等で実施する音楽表現活動でICTを有効的に活用することができるのか、大きな不安が残る。そのため、指導法の授業内での活用も慎重に実施すべきだろう。もちろん、実習園等で弾き歌いレッスンのように通信機器を活用し、双方向で何か活動をするということは考えにくい。適切にそれぞれの通信機器の特質等を理解した上で学生が活用していけるのかという疑問が生じる。また、実習園等での音楽表現活動において、どのようにICTを活用していくのか、どのように取り入れれば、保育者の手助けとなり、表現活動に有意義な活用となるのかを検討しなければならない。そのため、保育内容「表現」の指導法の授業を検討する際、情報通信機器を効率的に活用し、自身で音源の作成をおこなってみたり、実際の保育の中でどのように音源を活用してみたりすることができるかを検討するなど、グループワークとして実施していくことができるのではないかと考えられる。

### 3-2. 幼稚園等でのICT活用について

幼稚園等での音楽表現活動の中で検討できるICT活用を考えると、基本的には子どもたちの興味関心をひくという目的での使用が相応しいのではないだろうか。音楽表現活動に関しては、子どもたち自身で情報通信機器等、ICTを活用して活動をするというよりも、興味関心を刺激するような活用の仕方が適当だと考えられる。限界があるということだ。

先にあげた幼稚園等での音楽表現活動をふまえると、例えば合奏の発表をする際に、大勢での演奏をおこなうことをイメージしやすいように、オーケストラ等の舞台での映像をみせたり、また楽器の扱い

などをみて理解してもらったりと、そのような補助的な活用に関しては可能なのではないかと考えられる。そうすることで、子どもたちが、楽器の役割や楽曲の雰囲気などをさらに深くイメージしやすくなる。「表現」という分野の内容、取組み、活動においては、言葉で説明しづらい部分が多い。さらには、芸術に関しては、実際に目で観る、耳で聴く、触れるなど、実体験での活動が必要であるため、そういう類のものを文字で説明したり、言葉で説明したりということは相応しくない場合もあるし、困難な場合もある。それに感じ方も個々に違って来る。そのため、視覚的に子どもたちにわかりやすくイメージを持ってもらうことや理解するためのサポートの役割での活用というものが適当なのではないかと言える。あくまでも子どもたちに興味関心を持たせ、意欲につなげる、そして最終的に主体的な活動へのステップにするということだ。

また、例えば保育者自身も何かお手本を見せながら、子どもたちと一緒に活動をする際には、CD

などで音源を流しながらおこなうことで、子どもたちと一緒に活動でき、思いや感じ方を共感することも可能だ。

音楽発表会やお遊戯会を実施する時などは、子どもたちの様子を録画したり、録音したりしながら、練習時に映像を視聴することで、自分たちの取り組む姿を確認し、練習やリハーサルに活用することもできる。発表会後には、本番の様子をそれぞれが観たり聴いたりしながら、活動を振り返ることもでき、次回以降の活動の幅が増えたり、ステップアップにつながったりするだろう。幼稚園教育要領解説「表現」の内容<sup>12</sup>には以下のように説明されているように、やはり子どもたちにとっては、実体験が何にもかえがたいもので、保育者は様々な体験を通して子どもたちの感性が育まれるように、園での音環境を整えておかなければならない。また、子どもたちが音楽を楽しもうとする意欲を持てるようにするためにも、保育者自身が音楽活動を楽しめるようであればならない。

#### (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

幼児は、一般に音楽に関わる活動が好きで、心地よい音の出るものや楽器に出会うと、いろいろな音を出してその音色を味わったり、リズムをつくったり、即興的に歌ったり、音楽に合わせて身体を動かしたり、ときには友達と一緒に踊ったりしている。このように、幼児が思いのままに歌ったり、簡単なリズム楽器を使って遊んだりしてその心地よさを十分に味わうことが、自分の気持ちを込めて表現する楽しさとなり、生活の中で音楽に親しむ態度を育てる。ここで大切なことは、正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうことである。そのためには、教師がこのような幼児の音楽に関わる活動を受け止め、認めることが大切である。また、必要に応じて様々な歌や曲が聴ける場、簡単な楽器が自由に使える場などを設けて、音楽に親しみ楽しめるような環境を工夫することが大切である。一方、教師と一緒に美しい音楽を聴いたり、友達と共に歌ったり、簡単な楽器を演奏したりすることも、幼児の様々な音楽に関わる活動を豊かにしていくものである。このような活動を通して、幼児は想像を巡らし、感じたことを表現し合い、表現を工夫してつくり上げる楽しさを味わうことができるようになる。さらには、教師などの大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、幼児が音楽に親しむようになる上で、重要な経験である。このように、幼児期において、音楽に関わる活動を十分に経験することが将来の音楽を楽しむ生活につながっていくのである。

図1

## 4. 幼小接続について

ICTの活用については幼小の接続を考えると、小学校低学年での音楽科の内容も検討しなくてはならない。小学校学習指導要領第3章第1節の第1学年と第2学年の目標<sup>13</sup>には、(1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付くとともに、音楽表現を楽しむために必要な歌唱、器楽、音楽づくりの技能を身に付けるようにする。(2) 音楽表現を考えて表現に対する思いをもつことや、曲や演奏の楽しさを見いだしながら音楽を味わって聴くことができるようにする。(3) 楽しく音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、身の回りの様々な音楽に親しむとともに、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う、と書かれている。

音楽表現を楽しむために必要な技術を培うことが求められているが、幼児期には基礎となる歌唱や簡単な楽器への理解がある程度できるようになり、そしてなによりも大切にされるべきものとして、「音楽を楽しむ」「音楽表現活動を楽しみと感ずること」であるということがわかる。小学校音楽科の授業においては、音楽鑑賞時にICTを活用することができ、具体的にはオーケストラの演奏を聴いたり、実際の映像を観たりする機会も多くなるだろう。

## 5. 考察と課題

今回は、保育内容の指導法の音楽分野の研究として、幼稚園等での音楽表現活動におけるICT活用や保育を学ぶ学生のICT活用に着目した。これまで、音楽表現活動でのICT活用についてはほとんど研究されていなかった。保育者養成校ではまずは「ピアノの演奏技術」、そして、実習や就職先での音楽活動をスムーズにおこなうための「ピアノの弾き歌い」技術を指導することが優先であるからだ。2年間という短い保育者養成校での学びの中で、実習が複数回あり、指導実習の際にはほとんどの場合、朝の会、昼食時、帰りの会などの歌唱活動を担当することもあるため、少ない時間の中ではピアノ初心者である学生の技術力向上が最優先課題となる。ピアノに関する指導に時間をさかなくてはならない状況の中で、音楽表現活動ではどのようなICT活用が有効なのかについては、あまり研究する余裕がないことも理解できる。

さらには、音楽科目のように感性を培う活動の分野では、デジタルの情報通信機器などを使って、活動をすることが適当なのかという疑問も残る。ICT活用は、音楽の分野においてはあくまで子どもたちの興味関心をひくため、補助的なものである。まずは学生たちそれぞれの音楽的なスキルアップが必要となる。ICTに頼りすぎることなく、保育ができるよう音楽的な基礎技術を習得することが大切である。何もかもすべてICTに頼りすぎてしまい、本来の“音”や“質”をないがしろにしたり、実体験を忘れてしまったりするような活用方法には注意をしなければならない。

幼稚園等での音楽表現活動におけるICT活用をいくつかあげてみたが、音楽に関しては、活用はあくまでも限定的ということが相応しい。実際に子どもたちが積極的に情報通信機器を使用して、何かを作り出すという段階ではなく、すべてを情報通信機器等に頼ることはせず、音楽表現活動をおこなっていくべきなのである。

本物の音を聴く、子どもたちにそのような「音環境」を提供するということが前提でなくてはならないのではないだろうか。子どもたちが日ごろから興味を持っている自然の音、虫の声、好きな話し声、好きな音を聞き逃してしまうことは保育者としてあってはならない。子どもたちが関わる音環境、日々聞いている音を大切にしていかななくてはならない。幼稚園等の幼児教育機関においては、表現活動で実体験を取り入れ、子どもたちの音環境を守っていかなければならない。そして、保育者は、子どもたちの観る世界、聴こえる世界に共感できるようにしなければならない。

しかしながら、ICT活用は避けて通れないため、今後は授業内でも学生自身がICTを就職後に適切に活用できる内容や学びを提案し、音楽表現活動で無理なく安定的にICTを取り入れられる方法を考えていくことが課題であると感じた。また、幼小接続の部分においては、今後、小学校の音楽科教育における具体的なICT活用方法を参考にしながら、さらに研究を深めていきたい。また、幼稚園教育要領や解説に書かれてある内容に基づいた表現活動、特に音楽分野で求められている活動の本質的なことに関しては、今後も引き続き幼稚園教育要領や保育所保育指針等を踏まえた丁寧な研究をおこなっていきたい。

## 参考文献

- (1) 「幼稚園教育要領」文部科学省 平成29年告示
- (2) 「幼稚園教育要領解説」文部科学省 平成30年3月
- (3) 小学校学習指導要領解説 文部科学省 平成29年告示
- (4) 二宮貴之「教員・保育者養成校における音楽教育実践研究2：ICTを取り入れた合唱教育について」学校音楽教育研究 2014年
- (5) 中平勝子他「ピアノ弾き歌い教育の質保証」日本教育工学会 2012年
- (6) 長嶺章子「ピアノ弾き歌い学習支援におけるICT利活用の効果と課題」植草学園短期大学紀要 2017年
- (7) 無藤隆他『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか』萌文書林 2017年
- (8) 吉永早苗他『保育内容表現』光生館 2018年
- (9) 宮川萬寿美他『保育の計画と評価』萌文書林 2018年
- (10) 田澤里喜他『表現の指導法』玉川大学出版部 2014年
- (11) 坂本毅啓他『福祉職・保育者養成教育におけるICT活用への挑戦』大学教育出版 2019年
- (12) 深見有紀子他『音楽科教育とICT』音楽之友社 2019年

## 注

- 1 保育所、幼保連携型認定こども園を含むが本文では幼稚園等と記述する。
- 2 幼稚園教育要領解説 文部科学省 平成30年3月
- 3 本研究では、指定保育士養成施設、幼稚園教員養成機関をさす。
- 4 幼稚園教諭養成課程をどう構成するか モデルカリキュラムに基づく提案 萌文書林 2017年
- 5 情報通信技術を意味し、ICT教育ではパソコン・タブレット端末・DVD教材などを使って授業展開をしていく。
- 6 学校におけるICT環境整備の状況について 文部科学省 平成28年10月
- 7 令和2年4月に発出された緊急事態宣言の影響により、前期のほとんどのピアノレッスンをオンラインにて実施。
- 8 令和2年11月30日
- 9 令和2年11月30日
- 10 幼稚園教育要領第2章 ねらい及び内容「表現」
- 11 保育内容の指導法「音楽表現」に関する一考察 (諸井 淑徳大学短期大学部紀要第59号 2019年)
- 12 幼稚園教育要領解説 p 240 (文部科学省 平成30年)
- 13 小学校学習指導要領解説 音楽編 p 29 (文部科学省 平成29年)